

難病ピアの質的調査の特徴

—変容と相互支援—

梓 川 一

Characteristics of qualitative research about peers
with incurable disease : Change and mutual support

Hajime Azusagawa

豊岡短期大学 論集

第 16 号 別冊

令和 2 年 3 月 31 日 発行

難病ピアの質的調査の特徴

—変容と相互支援—

Characteristics of qualitative research about peers with incurable disease : Change and mutual support

梓川 一

Hajime Azusagawa

はじめに～セルフヘルプグループにおけるピア～

セルフヘルプグループとは、何か課題を抱える当事者が、その当事者の仲間同士で支えあうグループである。社会や個人の多様化とともに、最近では多様化の傾向があるが、取り組むテーマやメンバーの思いに変わりはないと思われる。

セルフヘルプグループの特徴として、野村は、次の3つの排除について指摘している¹⁾。第一に、専門知による問題の定義を排除する。第二に、専門家による問題の固定化を排除する。第三に、専門家とクライアントという役割の固定化とそれによる問題の固定化を注意深く排除する。つまり、セルフヘルプグループとは、専門家ではない当事者同士が、ピア(=仲間)として向きあい、ささえあうグループであるため、そこに専門職や専門職の専門性というものは求めていないことを指摘しているのである。

久保は、セルフヘルプグループには2つの意味があることを指摘している。第一に、個人による自助、独立の意味である。第二に、相互援助、共同の意味である²⁾。さらに、久保は、セルフヘルプグループの構造的特徴の1つとして「他者を援助することはグループにとっての規範である。したがって selfhelp という用語の self は『他者』への援助も同時に含んでいる」と言う³⁾。

こうした自分への援助とともに他者への援助の意味を持ち、相互援助に展開していくセルフヘルプ・グループ(=本論では難病患者会にあたる)の主たる活動に、ピア・サポート(ピア(=仲間)としての当事者同士の支えあいの活動)がある。具体例として、難病患者会における難病ピア(難病患者会における難病者と難病者の仲間の関係のことであり、以下、「難病ピア」と表記する)同士の「電話相談」「語りあい」「患者相談会」「研修会・セミナー」「グループワーク」「アンケートやインタビューの調査」などがある。これらの活動からヒントを得て、筆者は「難病ピアの質的調査」(=難病者が難病者にインタビューをする質的調査)を提案し、拙稿⁴⁾をベースに、そこから難病ピア

の姿と関係を検討する。

第一に、ピア（＝仲間）であるがゆえに、互いが仲間意識をもって向きあう。第二に、互いのナラティブ（＝語り、物語）が常に存在している。語りあう場面には、いつも「物語」がある。第三に、相手のナラティブを聴こうとする姿勢がある。「あなたのことをもっとわかりたい」という傾聴愛がある。第四に、同じような境遇に生きてきた者同士には対等な関係が自然と生まれてくる。以上の4つには、相手の心を汲みとろうとする姿勢、わかちあおうとする姿勢が表れている。このような姿勢と関係があるからこそ、難病ピアは互いにありのままの感情を表出することができる。そして仲間同士で「絆を強め合い」、「お互いに分かり合え、安全で安心」できるのである⁵⁾。

本論では、難病ピアによる質的調査の特徴を明らかにするために、以下の3点に着目する。①難病ピア同士の立場と関係、②難病ピア同士がもつナラティブ、③ナラティブ・アプローチの基礎概念や方法論である。ここから難病ピアの質的調査の特徴を整理することによって、難病ピアのわかちあいと支えあいの根本的な要素を考察する。

調査者と被調査者の立場性

「調査とは何か」の自問～調査者としての自覚～

筆者が質的調査に取り組むときに、様々な問いが思い浮かぶ。それらを自問することによって、調査者は改めて自分を見つめ直し、人間の尊厳という原点に立ち返ることができると考えている。

当然ながら、調査者が調査を行う。調査をスタートする時点で、調査者は調査のプランを設定し、調査のプロセスを見据えている。学問や研究は、科学的な志向と根拠を求めるため、調査によって実証する必要がある。調査の本質をおさえ、調査の見通しをつけるためにも、「調査とは何か」「調査の動機は何か」「何のために調査をするのか」「なぜ、この調査対象者を選んだのか」「調査の利益や意義は何か」「被調査者へのフィードバックや社会貢献はできるのか」について、調査者は事前に検討しておくべきである。

調査を大きく区分すれば、量的調査と質的調査がある。被調査者は、質的調査では一人あるいは少人数であるが、量的調査では多数になる。量的調査は科学的な根拠や妥当性を明示することを強みとしているが、質的調査には調査者の主観も入り込み、厳密な客観性に基づいた尺度をもって、分析の結果を数値化することはできにくい側面がある。しかしながら、これらは決して欠点ではなく、量的調査にはない質的調査の独自性と特異性であり、むしろ、質的調査であるがゆえに、個の内面や個別性により接近できる意義がある。

特に、本論のような難病ピアの質的調査の場合、人と人、ピアとピアの関わり、ささえあい、わかちあいを捉えていくため、随所に主観的要素は存在している。さらには、客観性や科学性からは捉えきれない要素として、科学的な分析や探究では入り込めない「難病者の神秘的な世界」「難病者

の意味世界」が広がっている。この個人の世界に立ち入り、心情を汲みとるには質的調査が必要なのである。

そもそも客観性や科学性とは何であるのか。「客観的世界は主観的解釈に取り囲まれて存在しているのであり、そこから切り離された存在として客観的世界を理解することはできないし、またこのような主観的解釈自体も変化していくのである」⁶⁾。つまり、人間が存在する限り、その人が思いや気持ち(=主観性)をもつ。そこから人と人の関係性において、複数の人間が多様な主観性を現実や事実として認めていく過程がある。つまり、すべては主観性からスタートし、主観性を発信しあうことで、人と人が認識しあい、それらが複数の人々によって承認された一つの方向性としての客観性が生まれてくるのである。

立場性に基づく調査の目的

調査者が、調査目的をもっている。言い換えると、調査者は調査のねらいや仮説をもって、調査の全体像の青写真を描いている。

一方、被調査者は、調査に協力する立場として一定の権利をもっている。その権利とは、調査者から「十分な情報と説明」を受けて、「納得に基づく同意」をし、「自己選択と自己決定」ができることである。もし、「被調査者が受け身的な立場や状況に置かれて、調査に協力している」「被調査者にとって調査協力の目的が不明瞭なままに調査協力を承諾している」とすれば、被調査者は主体的に調査に協力しているとは言えない。被調査者の自己選択と自己決定は阻害されているのかもしれない。

被調査者にとって、調査目的の達成にはどのような意味と意義があるのかについて、さらに調査目的は共有化されるべきであることを、調査者は自覚しておかなければならない。調査目的とは「調査協力をする者にとって、妥当であるのか、納得できるものであるのか」について吟味する必要がある。

被調査者の立場や心情を尊重する二者の関係性～被調査者への配慮の必要性～

一般の調査における二者の立場性からすれば、被調査者が調査依頼を受けた時点では、被調査者は弱い立場にある。例えば、「調査に協力する義務はあるのか」「調査依頼を拒否することはできるのか」「不利益を負うことはないか」など、様々な不安を抱える。そうなると、被調査者は自らの自由意思に基づいて自己選択と自己決定ができなくなる。

質的調査が実施されると、調査者と被調査者の二者は向きあうが、上述のように出会った時からすでに対等ではない関係があると考えられる。調査者には、調査する者としての立場があり、調査の動機や目的をもっている。調査者が主体となって調査を進めることによって、自ずと調査者が「主」になっている。被調査者には、調査される者としての立場、気持ちがある。被調査者は受け身になり、「従」になっている。

以上のような状況において、調査を開始する前に、調査者が優位な立場から調査の成果やその後

の自らの研究業績に強い関心をもっているならば、調査者の心理は調査者自身の側へと傾き、被調査者の立場はさらに弱くなる。

ここで調査者は自己覚知をする必要がある。「なぜ、私は調査をするのか」を再考し、受け身の状況におかれている被調査者の気持ちや心理を汲みとるような配慮が求められる。二者の出会いの前段階において、調査者は「被調査者の心理状況」「被調査者の価値観」を尊重し、調査者本位で被調査者をみていないかを再認識し、加えて、「調査実施に至るまでの二者の関係性を大切にしてきたか」「調査を前にして、二者の間には人間関係や語れるムードはできているか」「調査後のフォローはできるか」などの二者の関係性についても踏み込むべきである。さらに、倫理的な観点として「相手を一人の人間として尊重しているか」「被調査者の本音を聴き取ろうとしているか」「調査の承諾は被調査者の本心であるか」などについても、調査者は自問する必要がある。

難病ピアの質的調査の特徴

他人事ではない社会貢献のニーズ

調査者と被調査者である難病ピア同士には、他人事では済まされない当事者性があり、調査の目的が同じ方向を向いている。筆者が難病ピアの質的調査を実施した際には、「早く調査をしてほしい」「調査の協力をしたい」などの被調査者の思いや要望があがってきた。さらに被調査者にはなっていない他の難病ピアからも、「(難病ピアの質的調査を) 私にもしてほしい」という要望を受けてきた。こうした状況から、被調査者は調査を受けることを他人事ではなく、自分のこととして受けとめているのである。主体的あるいは協力的に「調査協力をする」立場やレベルであることがわかる。

「ぜひ、調査をやってほしい」という要望には、「難病ピアの被調査者自身のため」「難病の患者会(SHG)のため」「他の難病者仲間のため」「広く難病者の生活の支援の一助となるため」「広く社会全体のため」という思いが込められている。難病ピアの被調査者にとっての調査の目的および貢献は、広く社会性を帯びている。つまり、調査者もつ当初の調査目的が、被調査者自らの目的や社会の利益につながっていく。調査者と被調査者の間で、調査目的が共有化され、さらに社会化されていくことによって、「ともに歩む」共同の姿になっていく。このように被調査者は、質的調査を自らのこととして前向きに捉え、社会的な役割も認識していく。

被調査者と調査者の向きあいの根本的要素

難病ピア同士が、安心しあえる関係を構築していくことに意味がある。ここにはナラティブを媒介とした、わかちあいとささえあいがある。質的調査を進めていくと、調査者と被調査者の立場が交互に入れ替わることがあり、互いの立場からこれまでの生(=生活史、ナラティブ)をわかちあっていく。

難病ピアの調査者から質的調査を受けることによって、被調査者にはメリットや効果がある。ま

ず、仲間が本気で自分のナラティブを聴いてくれていると感じる。そこから感情をありのままに表出することができる。奈良難病連絡協議会（奈良ナンレン）の協力を得て、難病ピアの質的調査を継続しているが、調査後の振り返りにおける被調査者の感情の表出をまとめると、次のようになる。「ありのままの自分になれる」「自分に対して正直になれる」「互いがわかりあえる」「わかってくれるがゆえに安心できる」「仲間とともに自分の人生の物語に向きあえる」「仲間とともにここにいる」「仲間同士の居場所ができあがる」「共感しあえて、心が安定する」などである。

このように難病ピア同士の実践を通して、難病ピアの質的調査がもつ根本的要素を確認することができる。第一に、人間としての平等と対等である。そこからピアとして「今ここにいる」ことを実感する。第二に、質的調査の目的と利益の共有化である。共通の目的をともに目指すことによって「仲間を意識する」ことにつながる。第三に、共同作業である。「ともにつくる」ことである。共同作業ができるためには、前述の2つが保障されていることが前提になる。互いに向きあい、尊重しあうことで、互いにエンパワメントをしあう。これら3つの要素には共通の方向性があり、難病ピアのわかちあい、相互支援へつながっていく。これらが難病ピア同士の向きあいの根本的な要素である。

ナラティブから人生を見つめ直すチャンスをもつ

被調査者の「ある一時の発言や様子」を捉えて、これで調査を完了することになれば、被調査者の本来の姿や本音を聴き取れていない可能性がある。これは、調査者側の解釈と都合から捉えた調査になるだろう。

難病ピアによる質的調査は、日々の生活の中で、難病ピア（＝仲間）から調査を受けることに特徴がある。ナラティブという人生の物語（＝人生の歩み、時間の経過）を見通していくことによって、被調査者の人生のプロセスから被調査者の生活や心を汲みとる。そのためには「その時々」の生活の背景や「人生の歩みとしての生活の全体」を、被調査者のペースで継続的に振り返り、ともに語りあい、ともに見通していく。ナラティブのデータの持ち主である被調査者が主体となり、調査者が被調査者のナラティブを傾聴する。被調査者と調査者は、これまで携えてきたナラティブを吟味し、必要であれば、ナラティブを崩壊させていくこともある。その次には、二者の共同製作によって新たなナラティブを再構築させていくこともある。この共同の歩みのプロセスにおいて、被調査者は自らのナラティブを、時間をかけて再認識し、自らの人生を見つめ直すことができる。質的調査のプロセスにおいて、調査者は被調査者が携えてきたナラティブを受けとめめながら、被調査者がわかるようにそのまま表していく。この生きたデータ（＝文字化した、加工しないデータ）について、被調査者が主体となって、二者でふりかえり、わかちあいながらナラティブを再確認していくのである。このようなインタビューの場面以外の二者の向きあいのプロセスに、難病ピアの質的調査の特徴がある。

主体的な自己犠牲

被調査者である難病ピアが、自分の生き方やものの見方や考え方を捉え直し、主体的な姿勢の被調査者に変容していく。被調査者には、難病ピアの質的調査を「他人事ではなく、まさに自分のこととして捉えよう」とする姿勢がある。ここには「他者への痛覚を感じる」⁷⁾ほどに、難病ピアの仲間のことを感じていく感性があるのだろう。そして難病ピアの質的調査の社会的意義を尊重し、「被調査者になりたい」「さらに私にできることはないか」と、あつい思いと使命感をもつようになる。日頃、自らに心身の苦痛や苦悩をもつ被調査者が、社会における自分の役割を認識していくのである。

被調査者は「受け身的存在」「～される存在」ではないのである。調査者と被調査者は難病ピアの互いの関係を維持しながら、「対等」「仲間」「ともに」を体感している。被調査者は、一般的な被調査者の立場や求められる役割を越えて、自分についての生データの所有者として、参画していく質的調査のプロセスにおいて、「受け身的な存在」から「主体的な存在」へ変容していく。そこで被調査者は主体的な自己決定が可能になってくる。

このような被調査者からは、「調査をしてほしい」「次の調査はいつですか」「もっと時間をかけてほしい」との声(=思い)も生まれてくる。これは被調査者が主体的に参画しているからである。調査における二者の対等性、共通の目的や利益の認識から、日々、苦痛や苦悩を抱える被調査者が「私は一人ではない」という感覚から、「ともに取り組みたい」「もっと協力したい」「社会に貢献したい」という主体的な要望(needs)を表出するようになる。筆者は、難病をもって苦痛と苦難を抱えながらも、このような他者支援や社会貢献のために意欲的に生きる姿勢のことを、「主体的な自己犠牲」と捉えている。難病ピアに共通する特徴である。

「自分探しの旅」からセルフ・エンパワメントへ

被調査者が質的調査に参画するプロセスにおいて、その内面にはこれまで生きてきた様々な思いや人生観が浮かんでくるであろう。これまで生きてきた自分、難病をもって生きている自分に向きあっていると、その向きあいからは時間軸・プロセスを意識するようになる。過去のある出来事や経験、生きてきた人生の物語(ナラティブ)に向きあうことになる。このように被調査者は、「自分に向きあう」「自らのナラティブに向きあう」という体験をすることで、被調査者は難病ピアの質的調査を通じて、あの時、あの場面の自分に改めて気づく。こうした体験のプロセスとは、「自分探しの旅」「自己発見の旅」⁸⁾に出ているということである。

自らの生活史を振り返る旅において、「調査される存在」「受け身的存在」「支えられる存在」の被調査者は、自分に向きあい、難病に向きあい、人生に向きあい、そして質的調査における自らの役割を認識することによって、被調査者は主体的存在としての自分に気づいていく。さらに、自分自身のことから、他者への支援や社会への貢献を考えるようになる。「自分にはこのような大切な役割があり、社会に貢献している」と認識できることによって、プラス志向の意欲をもつようになり、

自分を認め、自分による自分への支援（＝セルフ・エンパワメント）につながっていく。このようなプロセスには新しい発見や気づきがあり、主体的に生きることへのモチベーションはアップしていく。そして、被調査者自身へのセルフ支援となり、難病ピアである被調査者と調査者の相互支援となる。

相互支援の関係性から捉える

一般の調査とは異なり、難病ピアの質的調査では、調査者と被調査者の立場の逆転現象が起こりうる。難病ピアの質的調査は、「対等と平等」から始まる。ともに歩んでいくプロセスにおいて二人の関係性と立場は、被調査者が「主」になり、むしろ調査者が「従」になっていく。つまり、被調査者を主体とする姿勢やスタンスから、調査者は伴走者となり、被調査者の支援者となる。ここにも難病ピアの質的調査の特異性と独自性がある。

これまでの考察から、難病ピアの質的調査では、調査データの収集と科学的分析を第一義的なテーマとしていないことがわかる。自分に向きあうこと、自分のナラティブに向きあうこと、調査者と被調査者が互いに向きあうこと、相手のナラティブをわかろうとすること、をテーマとしている。難病ピア同士の自己認識と他者認識から互いがわかちあうことによって、被調査者は自分のことをわかってもらえると感じていくことで、自分は「一人ではない」という安心感をもち、難病者としての孤独から脱することができる。調査者は、被調査者に向きあい、質的調査を通して、そこから質的支援への展開を意識することもあるだろうが、実は被調査者によって調査者が支えられていくことにもなる。支援とは一方通行ではなく、「ケアし、かつケアされている」のである⁹⁾。こうして難病ピアの質的調査は、科学的な調査と分析という枠を越えて、相互支援の関係をつくり出していく。調査が調査でとどまるのではなく、調査を通じて支援となっていく。

調査者がナラティブを語る意味～ナラティブ・アプローチの援用～

これまでの検討から、難病ピアの質的調査の特徴として、被調査者と調査者における「対等な関係性づくり」「共同作業」「自分探し」「セルフ・エンパワメント効果」「相互支援」が挙げられる。これらを基にして、調査者と被調査者の関係と立場から、調査者も自らのナラティブを語るこの意味について考える。

相互理解の関係性の構築

第一に、調査者が、調査者であることをなくすことにある。被調査者は、二者の間に築かれた立場の壁を感じたりすることもあるだろう。調査者が自らのナラティブを表明することによって、向きあう「私とあなた」は対等であり、仲間であることを認識し、わかってくれると感じ始める。そして、調査者からも、被調査者からも、調査の意識や調査者の存在が自然と消えていく。調査者も向きあう相手を、被調査者ではなく、ナラティブの共同制作者と捉えていく。

第二に、被調査者に、調査者の人生の物語をわかってもらうことである。この「わかる」とは、互いに通じあい、信頼できる関係性ができあがることである。ありのままの姿で向きあうことによって、難病ピアの質的調査における対等な関係と存在を認識する。調査者が自らのナラティブを表出することによって、被調査者も「仲間」を感じ、「ありのままがいい。ふつうでいい」と安心していく。調査者が相手のナラティブを聴いていくためには、自らのナラティブを語る準備をしておくこと、被調査者に安心を与えていくこと、わかちあえる信頼関係を築いていくこと、である。

第三に、ラポールを形成することである。中道は、調査者が被調査者から信頼できる情報を手に入れるためには、被調査者との間にラポール (=親密で信頼し合う関係) を形成できるかによることを挙げて、ラポールを形成するための要件を明らかにしている¹⁰⁾。例えば、調査者は被調査者と生活をともにすることによって、互いの一体化を図ることをいう。しかし、注意すべきことは、一体化に向けて、つぶさに被調査者の行動を観察する調査者は、被調査者から警戒されてしまうことになる。一定の距離を維持しながら、客観性を失わないことが要件である。また、ラポール形成が最終目標ではない。調査における環境や状況を作り出すプロセスでもある。さらに、調査者はラポールが形成されていると思っても、被調査者の側はそうではないこともある。特に、難病者にとってラポールを形成することが、自由な意思表示や自己決定を阻害するマイナス要因や足かせになることがあることも、十分に留意しておかなくてはならない。

上記の3つについては、奈良ナンレンの協力のもとで実施している難病ピアの質的調査を、次のように実践している。奈良ナンレンの理事会では、難病ピアの質的調査の実施と協力について承認されている。また、調査についての全体説明会では、共通認識をもって調査者と被調査者の共同で調査を進めていくこととして、次の3つを確認している。①仲間であることをわかりあう。②調査の目的と意味を共有し、互いの立場を尊重しあう。③調査者と被調査者の共同調査であることを再確認する。つまり、調査する優位な立場の調査者が、調査される弱い立場の被調査者を調査していくのではなく、対等な立場を確認しあうことを意図するものである。

互いのナラティブの崩壊と再構築

調査者も被調査者も一人の人間として独自のナラティブをもっている。さらに調査者と被調査者のそれぞれがもっている調査に関するナラティブ (=物語) もある。人は日常の生活のなかで、思い込みや決めつけのストーリー (=ドミナント・ストーリー) を抱えていたり、占有されて過ごしていることがある。それらを崩壊させ、また構築することに着目する¹¹⁾。

調査者と被調査者の二者が出会う前から既に、調査者と被調査者の内面には、調査に関するディスコースとして、互いに対するドミナント・ストーリー (=互いに対する思い込みのストーリー) を携えていることがある。互いの向きあいのためにも、これらをいかに壊すことができるかが第一のテーマである。第一段階として、従来の調査者と被調査者の関係性、ディスコースや先入観のナラティブ (=ドミナント・ストーリー) を崩壊させる必要がある。被調査者にとってのドミナント・

ストーリーとは、「調査者は、どうせ私を研究対象にしかみていない」である。一方、調査者にとってのドミナント・ストーリーとは、「被調査者は、どうせ私の調査に協力してくれるはず」である。二者がもっているこのような「決めつけ」「思い込み」「先入観」から構築されたストーリーを消し去っていく必要がある。

ドミナント・ストーリーが崩壊された後の新しい展開として、調査者が自らのナラティブを語ることによって、被調査者の内面に変化が起き、被調査者が調査者との新しいオルタナティブ・ストーリー（＝共同の支えあいのストーリー）を創りあげていく。ナラティブを「かすがい」「介在」として、調査者と被調査者の二者は「わかちあい」「ともに歩む」共同調査者となっていく。そこで第二段階として、調査者と被調査者の二者は、調査における共同制作の関係となっていく。そして、調査者と被調査者の二者が新しいナラティブ＝オルタナティブ・ストーリーを共同で構築していく。調査者のナラティブを聴いた被調査者にとってのオルタナティブ・ストーリーとは、「調査者も、実は彼の人生において苦しいにもかかわらず、私（＝被調査者）のこともわかってくれる」のである。一方、被調査者にナラティブを語った調査者にとってのオルタナティブ・ストーリーとは、「被調査者は、苦しい状況であるにもかかわらず、懸命に調査に協力してくれる」である。こうしたプロセスから、難病ピア（＝仲間）として信頼関係を築いていく。

おわりに～ナラティブをどのように捉えるか～

最後に、難病ピアの質的調査の特徴を検討するにあたり、筆者はどのようにナラティブを捉えているかを明らかにしておきたい。

人生の時間軸と体験軸から「ナラティブ」を捉えることによって、その一時一時の個人の生活や心情にリアルに接近し、感じることもできる。さらに、人生の物語を本人とともに辿ることによって、過去から現在に通じてくる、「今、目の前にいるあなた」の人間の存在とその当事者性に気づくこともある。つまり、ナラティブは、一人の人間とその人生にまつわる豊富な要素をもっている。

筆者は、ナラティブを一つのデータとして捉え、科学的分析を研究テーマとして追い求めているのではない。本論における難病ピアの質的調査の検討とは、個人がもつ独自のナラティブを感じ取ること・わかちあうことを主たるテーマとして目指している。個人のナラティブから表わされてくる一人の人間とその人生の姿と存在に近づくことによって、一人の人間の生や人生をわかること、わかちあうことを少しでも深めていこうとする。「どのように一人の人は生きていくのか」、「どのような生活関係や人間関係をもって人生を歩んでいくのか」を少しずつわかるためには、ありのままに、誰にも臆することなく、自由にナラティブを語ること、語りあうことから始まる。

引用文献

- 1)野村裕二. (2002). *物語としてのケア*(p.167). 医学書院.
- 2)久保紘章・石川到覚編著. (1998). *セルフヘルプグループの理論と展開*(pp.2-3). 中央法規.
- 3)久保紘章. (2004). *セルフヘルプグループー当事者へのまなざしー*(p.15). 相川書房.
- 4)梓川 一. (2018). ピアカウンセリング実践の社会的な意味と役割. *豊岡短大紀要*. 139-140.
- 5)岩田泰夫. (2008). *セルフヘルプグループへの招待*(p.41). 川島書店.
- 6)Ken Plummer. (1991). *生活記録の社会学：方法としての生活史研究案内*(原田勝弘, 川合隆男, 下田平裕身, 監訳). p.84. 光生館. (Ken Plummer. (1983). *Document of Life:An Introduction to the Problem and Literature of a Humanistic Method*.London,George Allen & Unwin Ltd.)
- 7)秋山智久. (2000). *社会福祉実践論*(p.5). ミネルヴァ書房.
- 8)バリッシュ. 吉田利子訳(1996). *癒やしの道*(p.610). 日経 BP.
- 9)ミルトン・メイヤロフ. 田村 真・向野宣之訳(1987). *ケアの本質*(p.16). ゆみる出版.
- 10)中道 實. (1997). *社会調査方法論*(p.248). 恒星社厚生閣.
- 11)楡木満生. (2005). ナラティブ・セラピーの理論と実際. *日本保健医療行動科学会年報 Vol. 20*, 51-55.